

研究概要

1. 研究名称 または課題名テーマ等

Pitts-burgh Sleep Quality Index を用いた鏡視下腱板修復術前後における睡眠状態と疼痛変化
—後ろ向き研究—

2. 研究責任者(当院)

所属： リハビリテーション室

氏名：廣田知佐恵

共同研究の場合は代表機関 及び 代表者名

機関名：なし

代表名：なし

3. 分担研究者

所属： リハビリテーション室

氏名：白井智裕、奥村太朗、小川侑男、桑原康太

4. 研究対象者

2018 年 8 月 1 日～2020 年 6 月 30 日の間に、聖隷佐倉市民病院において
腱板断裂に対して鏡視下腱板修復術を受けた方

5. 研究の必要性

腱板断裂 (Rotator cuff tear : RCT) 症例は夜間痛, 動作時痛, 可動域制限の愁訴に対して鏡視下腱板修復術 (Arthroscopic Rotator Cuff Repair : ARCR) を施行されることが多い。特に夜間痛は高頻度に睡眠障害を呈し生活の質 (Quality of life : QOL) を低下させると報告されている。近年, 手術の発展により良好な ARCR の治療成績が報告されているが, 臨床上においては数多くの症例で術後疼痛の遷延化を経験する。特に夜間痛に関して, 術前に夜間痛を自覚した症例では術後の夜間痛が術直後一度増悪しその後改善に転じる特徴的な経時的变化を認めるとの報告や, 術前の夜間痛の存在が術後の自動内外旋可動域の改善を遅らせるとの報告がされている。また, 術後疼痛の残存リスク因子として術前の疼痛強度が有意に影響を及ぼすとの報告がされており, 術前から夜間痛やそれに伴う睡眠障害を把握することは非常に重要である。術前の睡眠障害が術後成績に与える影響を評価することにより, 術後の予後予測が可能となり, リハビリテーションプログラムの再構築や良質なリハビリテーションの提供に繋げることができると考えられる。

6. 研究等によって生ずる個人への影響と医学上の貢献の予測

後ろ向きコホート研究であり, 日常診療にて収集した情報のみを使用するため, 本研究によって生じる個人への影響はないと考えられる。

今回の検討による医学上の貢献の予測としては, 術前の睡眠障害を明確にすることで, 患者の術後疼痛管理や良好な臨床成績の獲得に繋げることができ, 治療成績が向上する可能性がある。また, リハビリスタッフにおいても具体的な数値で示すことでリハビリテーションのリスク管理や質向上の一助となると考えられる。

7. 対象者、関係者等からの問合せ先(当院)

連絡先番号：043-486-1151 (代表)

担当者氏名：廣田知佐恵

対応時間：8:30-17:00